

機関番号：22401
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：21820031
研究課題名（和文）巡礼路再生運動に関する宗教民俗学的研究
研究課題名（英文）The Study of Japanese Folk Religion in the case of the Pilgrims' Footpath Renewal Movement
研究代表者
浅川 泰宏 (ASAKAWA YASUHIRO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：90513200

研究成果の概要（和文）：200 字

本研究は巡礼に関する宗教的空間や伝統文化の変容を巡礼路再生運動という切り口から具体的に考察する。巡礼路再生運動は巡礼に関する歴史遺産や文化資源を掘り起こし、現代に再生する試みで、四国遍路では 2000 年頃から盛んになった現象である。本研究では、再生された巡礼路の踏破や接待活動の参与観察などから、巡礼空間の再生状況と課題や接待の民俗に関する「過去」と「現在」の切断/接合状況などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study investigates the changes in religious space and traditional culture of pilgrimage by using the case of the Pilgrims' Footpath Renewal Movement. The Movement became popular around the year of 2,000 in the Japanese *Shikoku Henro* pilgrimage. It tries to recover pilgrimage historical heritage and cultural resources, and reevaluates them in the modern era. I conducted fieldwork to observe how the recovered footpath is used by pilgrims and how *settai* is conducted. Based on them, the study reveals how the pilgrimage space is recovered, what are challenges and how *settai* folk culture is maintained or lost today from the past.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,020,000	306,000	1,326,000
平成 22 年度	940,000	282,000	1,222,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,960,000	588,000	2,548,000

研究分野：宗教学、文化人類学、民俗学

科研費の分科・細目：人文学・宗教学

キーワード：巡礼 宗教文化 民俗宗教 ツーリズム 四国遍路

1. 研究開始当初の背景

四国遍路は弘法大師ゆかりの聖地巡礼である。1990年代頃から徒歩巡礼が増加し、「癒し」や「自分探し」と結合するなど社会的に注目されている。こうした動向をうけて四国では、四国遍路の巡礼路（遍路道）を歴史遺産として、接待などの習俗を文化資源として「再発見」し、現代に「再生」する試みが2000年頃から盛んになった。具体的には、「昔の遍路道」の特定作業、道標や休憩所の設置、接待の組織化、世界遺産登録運動、巡礼や接待の体験学習があげられる。

筆者はこの潮流を「巡礼路（遍路道）再生運動」(Pilgrims' Footpaths Renewal Movement)と総称し、その特徴は宗教的な「祈りの道」の重みをアピールしつつ巧みに脱構築し、観光や地域づくりの資源に活用する点にあると指摘してきた[浅川 2008b]。同様の試みは、熊野古道や秩父三十四観音巡礼における「江戸巡礼古道」、あるいはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路カミーノ(Camino)などでも見られる。

四国遍路の場合、遍路道という空間と並んで重要なのが、弘法大師信仰を基盤とする巡礼者接待習俗「接待」である。筆者はこれまで、四国遍路に関する民俗知識が接待を産み出すメカニズムの解明に取り組んできた。かつて四国には巡礼を生業とする遍路が多く存在したという。「ヘンド」と呼ばれる彼らへの日常的な接待は、四国の中老年世代に広く共有されている集合的記憶である[浅川 2008a]。これに対し、現代的な接待では、(a)ヘンドにも接待してきた「歴史」が、無条件に他者を受容する「もてなしの伝統」と読み替えられ、(b)功德などの仏教的言説よりも「優しさ」などの精神性が強調された上で、(c)四国独自の「文化」として再定義される傾向が顕著に見られる。

だが、このことは現代の接待から宗教性が消滅したことを意味しない。個々の実践者の語りにおいては、大師信仰が表明されたり、「新霊性文化」[島藪 2007]のような現代的霊性が語られたりすることも少なくない。実践の繰り返しから、時に聖なる境地への近接が獲得されるという現代の徒歩巡礼の特徴[星野 2001][Raeder 2005]と類似の構造が、接待にも指摘できる。

こうした知見を踏まえつつ、民俗知識を可変的で複合的な構築物と捉えるとき、現代的に再構築された接待と「伝統的」な接待とは、どのように接合／切断されるのであろうか。さらに、その宗教性・聖性はどのようなものなのかという問いが浮上する。ここには、現代社会における (A) 宗教的空間および宗教民俗・文化の再構成、(B) 宗教性・聖性の変容あるいは創出、という2つの課題が密接に

関連して存在する。だが、これらを接合させた巡礼研究は未開拓であり、四国遍路の現代性の解明という要請に十分に応えているとは言えない。こうした学術的空白を埋めるべく、筆者は本研究「巡礼路再生運動に関する宗教民俗学的研究」を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究では、巡礼に関する空間や民俗・文化、とりわけ遍路道の空間的再編と接待の現代的再構成を、巡礼路再生運動という切り口から明らかにする。具体的には、(1) 巡礼路再生運動によって、地域の伝統的な宗教民俗や宗教的空間がどのように再構成されるのか、(2) とりわけ巡礼者接待習俗「接待」について、過去の記憶と現在の体験がどのようにに接続／切断されるのか、という問いを解明することを目的とする。

巡礼路再生運動の実践主体のなかでも、とりわけ興味深い対象として、徳島県海部郡牟岐町の「牟岐町お接待の会」に注目する。彼らは平成期に既存のボランティア組織を母体に成立した新しい接待集団である。この点で、例えば23番薬王寺の門前で毎年春に活動している紀州接待講のような、これまで研究対象となってきた伝統的な接待講の概念では捉えきれない対象といえる。

本研究では、参与観察にインタビューなどを交えながら、彼らが「過去の接待」と「現代の接待」をどのように切り結びながら、自らの実践を、過疎化による地域の衰退という危機意識のもと、生きがいつくりや地域振興に活用するのかを実証的に明らかにする。

これに加えて、香川、愛媛、高知からも調査地を選定し、四国遍路の巡礼路再生運動の全体像を描きだす。具体的には、お遍路交流サロンを運営する香川県さぬき市、ウォーキングイベント「トレッキング・ザ・空海」を開催する愛媛県南宇和郡愛南町、巡礼古道「そえみみず」を再生した高知県高岡郡中土佐町の3つの事例の比較研究を行う。さらに、四国遍路以外の巡礼路再生運動として秩父巡礼の「江戸巡礼古道」を調査し、両者の共通点と相違点を明らかにする。

3. 研究の方法

上記、研究の目的(1)については牟岐町(徳島県)、さぬき市(香川県)、愛南町、松山市(愛媛県)、西土佐町(高知県)など、四国各県の巡礼路再生運動の事例を選定し、その現地調査を行った。

各地域において再生された巡礼路を実際に踏破し、徒歩巡礼者の目線から巡礼路の空間的変容を観察しつつ、道標や休憩所など巡礼路再生運動で「書き込まれた」景観を、写

真またはビデオ撮影し、資料化した。加えて、行政や地域の運営主体など巡礼路再生運動に関わるエージェントに対して、インタビューを行った。なお、上述の「書き込まれた」景観という考え方は、I.リーダーの「moving visual texts」という概念を参考にしている[Reader 2005 および浅川 2008b]。

(2)については、牟岐町の「お接待の会」に絞り込んだインテンシヴな調査を行い、接待を産み出す微妙な心性を丹念にすくいとることを目指した。

本研究が目した牟岐町お接待の会は、平成12年に既存のボランティア組織を母体に結成された接待組織である。会員数は約80名で2~3名ずつシフトを組んで活動する。彼らの活動の拠点は町内に仮設テントで設置した接待所である。活動日に当番は接待所に出向き、茶菓子を用意して来訪する巡礼者を接待する。ほとんどが地元在住の高齢者であることもあって、巡礼者が少なく気候の厳しい夏と冬を避け、春(3~5月)と秋(9~11月)に3ヶ月ずつ、計6ヶ月の活動を行っている。

本研究では、できるだけ多くの会員とその活動を調査できるよう春秋に1週間ずつ連続して参与観察を行った。接待活動を観察・参加しつつ、空いた時間を利用してメンバーの巡礼や接待に関する記憶や意識などの聞き取り調査を行った。接待の風景はビデオカメラで映像化し、無意識的な身体所作や儀礼的行為を記録した。興味深いものは、インタビューでの考察材料とした。

会の運営費用や会員の参加状況、巡礼者の来訪回数、巡礼者の記帳ノートなど、お接待の会が記録しているデータについても、会の世話役より提供を受け、統計資料等を作成した。

さらに、お接待の会の母体となった町内の独居老人への配食ボランティア活動についても、弁当作成から各家庭への配食までの参与観察を行った。

調査に際しては、とりわけ高齢者が多いという事情に鑑み、①質問項目を厳選の上、簡潔で分かりやすい表現を心がける、②ゆとりをもったスケジュールを組み、対象者の心身の負担に細心の注意を払うなどの十分な配慮を行った。

上記の現地調査に従事する以外の時間は、文化資源論、ツーリズム研究、民俗知識論、現代宗教論などに関する理論研究と現地調査の資料整理を行った。

4. 研究成果

2009年度は、牟岐町お接待の会の接待活動と同町内の大坂峠遍路道、徳島県海部郡海陽町宍喰から高知県安芸郡東洋町甲浦に至る

古目峠遍路道、香川県さぬき市長尾から結願礼所の88番大窪寺に至る花折峠遍路道、高知県中土佐町から四万十町窪川に至る「そえみみず」遍路道などの現地調査を実施した。また巡礼路再生運動に関わるエージェントとして、国土交通省四国地方整備局や四国ツーリズム創造機構、さぬき市のお遍路交流サロンなどを訪問し、インタビューや資料の入手を行った。

2010年度は、牟岐町お接待の会の接待活動と、松坂峠(同町)、松尾峠(高知県宿毛市~愛媛県南宇和郡愛南町一本松)、柏坂峠(愛南町内海~宇和島市津島町)などの再生された遍路古道の現地調査を行った。お接待の会については、秋(10月)と春(3月)に1週間の集中的な調査を行った。接待の風景のビデオ撮影、メンバーからの聞き取り調査、調査者自身による接待の体験、さらにお接待の会の成立母体のひとつである配食ボランティアの参与観察などを行った。

その結果、明らかになったのは次の通りである。

(1) 遍路古道の再生状況と課題

近代のモータリゼーションの進展に伴って、交通インフラとしての役割を終え、次第にうち捨てられた存在になった遍路古道が、各地で歩き遍路向けに「再生」され、弘法大師やかつての遍路が通った「古来・本来の道」、あるいはやわらかい地面を踏みしめ、自然のなかを通過する「やさしい道」など優位な価値をアピールされており、改めて巡礼路再生運動が多様化・活発化している状況が浮き彫りになった。

とりわけ興味深いのは巡礼路再生運動の実践主体が多様であることである。例えばさぬき市の事例では、行政が比較的積極的に関与しており、道の駅などの一般の観光客らも対象とした施設と一体化した整備がなされているのに対し、牟岐町の場合は現在のところ、行政の関与はほとんどなく、住民主体の活動となっている。これにより生成される巡礼路の道案内の標識や休憩所などが醸し出す風景も統一感のあるものや、手作り感のあるものなどの差違がみられる。

また特に著しい変化をうけた巡礼空間であるそえみみず遍路道では、地域開発とそれに伴う文化資源の喪失という問題が確認された。現地では高速道路の建設に伴って遍路古道の一部が山ごと消滅し、かわりに高架橋をくぐる石段の迂回路が建設されたが、こうした宗教的空間の変容がどのように意味化されるのかという重要な課題が浮き彫りになった。

(2) 接待をめぐる「過去」と「現在」の切断/接合状況

これまでの接待についての研究は、接待を行う動機を弘法大師信仰に見だし、信仰の共有者という立場から発動する巡礼者への共感や功德の期待感によるものと説明してきた[例えば新城 1982 など]。これに対して、牟岐町お接待の会では、メンバーの参加動機として弘法大師信仰はあまり語られない。むしろ、知人や親戚の勧誘によるなど地元の間人間関係が前景化し、日々の活動についても巡礼者とのあるいはメンバー同士の語らいの楽しみなどが表面化する。そういった意味では現在の接待と過去とは明確に切断されている一面がある。

だが、語りを掘り起こしていくと、過去の接待の記憶が想起され、そこには①春の祝祭的な接待の伝統と、②これまで筆者が明らかにしてきた負の巡礼者「ヘンド」への接待の記憶が雄弁に語られる。①については地区によって差違があるが、②についてはほとんどのメンバーに共有されているという特徴がある。そして調査を進めるなかで、牟岐町の事例では春の祝祭的な接待の伝統を有する地区と町内の真言系寺院の詠歌組—すなわち民俗的・宗教的な活力を湛えた組織—の参加が、接待の再生に決定的な影響を与えたことが明らかになった。このことは新しい接待活動の創出において、過去の接待と接合することが重要であったことを示している。これをひとつのモデルとして構築した巡礼路再生運動における宗教民俗の現代的変容の見取り図を、2011年6月の日本文化人類学会第45回研究大会で「巡礼路再生運動における宗教民俗の組み替え」として発表した。

(3) 巡礼路再生運動のグローバル化

また牟岐町お接待の会の訪問台帳の分析から外国人遍路の動向を掴むことができた。これは巡礼路再生運動のグローバル化という今後の課題に関する資料となる。

ここでは、①同会が活動を開始した 2001 年以降、外国人遍路（ここでは資料の特性から、日本国外に住所を持つ遍路を外国人遍路と規定した）は増加し、とりわけ 2008 年は前年比で 150%を越える大幅な増加を示したこと、②出身地は米国、カナダなどの北米圏、フランス、ドイツなどの欧州圏が多く、これに次ぐのがオーストラリアで、アジアは予想外に少なかったこと、③年齢層は 20 代が 3 分の 1 を占め、日本人に比べて 60 代、70 代が少なかったこと、などを明らかにした。また外国人遍路の訪問は、接待者にコミュニケーション上の課題を意識させるが、その交流を通して接待というローカルな文化が外国人遍路にも受容されたという実感を持ち、自分たちの活動に刺激と張り合いを与えるものと、むしろ好意的に受け止められていることを聞き取り調査から明らかにした。

また 2011 年 3 月に実施した調査では、東日本大震災発生直後の四国遍路の状況についても急遽、聞き取り調査等を実施し、データを得たことを付記しておきたい。

浅川泰宏 2008a 『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化』古今書院。

浅川泰宏 2008b 「創出される表象空間—遍路道再生運動の事例から」『哲学』第 119 集，三田哲学会，35-64 頁。

島藺進 2007 『スピリチュアリティの興隆—新霊性文化とその周辺』岩波書店。

新城常三 1982 『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房。

星野英紀 2001 『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開』法蔵館。

READER, Ian 2005 *Making Pilgrimage: Meaning and Practice in Shikoku*. University of Hawaii Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 浅川泰宏，巡礼路再生運動における宗教民俗の組み替え—牟岐町お接待の会の事例から，日本文化人類学会第 45 回研究大会，2011 年 6 月 12 日，法政大学市ヶ谷キャンパス

[図書] (計 2 件)

- ① 星野英紀・浅川泰宏，吉川弘文館，四国遍路—さまざまな祈りの世界，2011，(第 3 章・第 4 章) 94-194 ページ
- ② 浅川泰宏，春風社，祓いの威力・払いの魔力—現代日本の民俗宗教，2009，織田竜也・深田淳太郎共編『経済からの脱出』(第 6 章) 139-165 ページ

[その他] (計 1 件)

- ① 浅川泰宏，四国遍路のグローバル化の一端—牟岐町お接待の会・訪問台帳にみる外国人遍路の動向，国際宗教研究所ニューズレター，査読なし，No.69，2011，pp2-7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅川泰宏 (ASAKAWA YASUHIRO)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：90513200